
武装神姫《BATTLECHRONICLE》

月影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫《BATTLECHRONICLE》

【Nコード】

N1195Z

【作者名】

月影

【あらすじ】

友との再会、神姫との出会い、学園での生活。そして、戦い

これは一人の少年とそのパートナーたる神姫、そして彼を取り巻く人々が織り成す、神姫と共に生きる町と呼ばれる場所で紡いぐ物語

武装神姫の二次創作です。PSPバトルマスタース2を元に書き

ますが、ゲームの内容が内容なので細かいストーリーはほぼオリジナルです。話のネタが思いつき次第、執筆・投稿という形をとるので更新は不定期となります。また原作に出てくるキャラも何人か出てきますが、キャラの性格において、読者の皆さんのイメージとの多少の相違が出てくるかもしれませんがご了承ください

第0話『神姫と共に生きる町』（前書き）

この物語はフィクションです。団体、地域名は架空のものとなります。

第0話『神姫と共に生きる町』

西暦2036年。第三次世界大戦もなく、宇宙人の襲来も無かった、現代から繋がる当たり前の未来。その世界ではロボットが当たり前の様に存在し、様々な世界で活躍していた。

神姫、それは全長15cmのフィギュアロボ、“心と感情”を持ち、最も人々の近くに存在。多彩な道具・機構に換装し、オーナーを補佐するパートナー。

その神姫に人々は思い思いの武装を装備させ戦わせた。名誉の為に強さの証明の為、あるいはただ勝利の為に

オーナーに従い、武装し戦いに赴く彼女らを人々は『武装神姫』と呼ぶ

まず目に飛び込んでくるのは神姫をつれて歩くたくさんの人々。神姫センターでは毎日の様に公式バトルが行われ、参加者と観客で大賑わいだ。更に魚屋を覗いてみれば猫型神姫のマオチャオが頭に捻り鉢巻を巻いて店主と一緒に店番をしていたり、公園で行われているストリートライブに耳を傾ければギター型神姫ベイビークラスがマスターと一緒にギターを弾き鳴らしている。学校では生徒と一緒に神姫が当たり前の様に授業に参加しており、それどころか勉強を教える教師の傍らにも教師を補佐するかの様に神姫が居る。その場所に一歩足を踏み入れれば神姫を見かけない事など無い、と言うくらいここは至る処に神姫が存在している。何時しか人々はこの場所

をこう呼んでいた“神姫と共に生きる町、神^{かみ}妃市”と

まだ雪が降り積もる12月、神妃市立神妃高等学校。物語はここから始まる

第1話『再会と始まりは粉雪が降り積もる場所で』

少年は緊張の面持ちで待っていた。茶髪のみドルヘアにほんの少しだけ鋭い目つきをした少年が厚めのフード付きのコートに身を包み、その手に一枚の紙を持ってじつとその時を待っている。少年だけではない、周りに自分と同じ様にその時を待つ少女少女で溢れ返っている。少年と同じ様に緊張の面持ちをした者も居れば、自分は大丈夫だと自信に満ちた者も居り、それとは逆に不安一杯なのか目を強く瞑り手を組んで祈ってる者も居る。そんな中遂にその時はやってきた。係りの人が少女少女たちの前に立ててあるボードに一枚の大きな紙を貼り付ける。そこにはたくさんの番号が順番に書かれており、時より飛んでいる番号もある。皆が目を凝らして自分の番号を探し始め、やがてある者は歓喜に包まれ、またある者は落胆に沈む。

そしてこの少年も同じ様に数字を探す自分の番号は0124。が、0122の次に表示されていたのは0125。自分の数字は存在しない。けれど少年は他の人と同じ様に落胆には沈まない。逆に少しホッとする、何故ならこの用紙に自分の番号が載っているものなら負けなのだ。やがて、係りの人が空いているスペースに一枚目の半分しかないサイズの用紙を張り出し、少年はそちらに目を向ける。そこには僅か10個の番号しか載っておらず、番号の並ぶ順番もバラバラだ

「0124、0124」

緊張の余り、口に出しながらその番号を探す少年、やがて

「……あつた」

上から5番目に表示されている124の番号、もう一度見比べてみるが間違いない

「……っし！」

感極まった表情で思わずガッツポーズをした。自分は勝ったのだと、両親との勝負に、目的は達せられた。と、同時にホッとしたのか体から力が抜け思わずフーっと思を吐いてしまった。

「よっしやああ……！！！！」

と、何処からとも無く響いてくる一際大きな歓声

「やったぜ！ たま子、合格だ合格！！」

「流っ石、ご主人様、すごいですう」

「おうよ、俺様にかかれば楽勝楽勝！」

「楽勝なのですう」

と、そこには自分のパートナーであろうマオチャオ型の神姫と共に喜びまくっている一人の少年。こちらは黒のツンツンヘアーに人懐っこそうな目をしている。余りに騒ぎすぎなのか落第してしまつた人達が恨めしそうな視線を向け始めるが、一人と一機はそれに気づかず「神妃高校、キタ……！」と未だバカみたい騒ぎまくっている。少年もそんな彼らの様子を啞然と眺めていたが、その視線に気づいたのか彼と目が合い、やがて自分の方に近づいてくる

「んんん？」

「ご主人様？」

「え、えつと……俺が、何、か？」

自分の顔をジッと覗き込んでいる相手に少し引き気味になりながらも、訊ねるとやがて彼は少年から顔を離し

「もしかして……お前、拓哉たくやか？」

「えっ？ まさか……甚平じんぺい！」

ここは、神妃市の神姫センター。神姫センターとは公式バトルと呼ばれる小規模の大会に使われる会場を始め、神姫協会直営のオフィシャルショップやカスタムエンジニアと呼ばれる人々によって改良されたパーツを取り扱うプレミアムショップ、その他にも談話スペースや軽飲食フロア等が存在している神姫と共に暮す人なら誰もが利用していると言っても過言では無い神姫関連全般の管理、運用を行う神姫協会が運営する大型施設だ

「いや、懐かしいぜ。まさかあんな所で旧友と再会するなんてよ」

「まさかは俺の台詞だ。小学校を卒業した後、遠くの町に引っ越し

たつてあいつから聞いたけど、神妃市に住んでたんだな。更に同じ高校を受験してたなんて偶然ってのは恐ろしいな」

この二人の少年。名は天音拓哉と大木戸甚平、小学校時代の幼馴染であったこの二人も今は神妃高校から神姫センターに移動し、軽飲食フロアでハンバーガーを食べている

「この町に住んでるなら、いや、住んで無くても神姫のマスターやつてるなら高校の第一志望は殆ど神妃高校になるからなあ。と、紹介が遅れちまったな。こいつはたま子、判つてるとは思うが俺の神姫さ。んで、こっちが天音拓哉、前に言つてた小学校時代の親友だ」

「たま子ですうゝ、ふつつつか者ではありますがよろしく願いますですうゝ」

そこで思い出した様に甚平がたま子と拓哉にそれぞれの紹介をするとたま子も自分自身の自己紹介を始める。言葉の単語を一つ間違えているが……

「ん、こちらこそよろしくな」

「で？」

拓哉もコーラを一口飲んだ後に言葉を返すと、甚平が周りをキョロキョロと見渡す

「で？ てのは？」

「とぼけるなよ。拓哉も神妃高校受けたつて事は神姫やってるんだろ？ どこに居るんだ？ お前の神姫は」

甚平が期待に満ちた表情で訊ねてきたが、拓哉それに「あゝ」と少し言いにくそうな反応を見せると

「スマン、神姫は居ないんだ。そもそもマスター登録すらしていない」

「はあっ！？ マスターじゃないってのに神姫高校を受験したって事か？」

先に甚平が言ったとおり、神姫高校はその独自の教育システムから神姫のマスターをやっている学生なら誰もが第一志望にする高校で、しかも同市に建っている神姫学院大学へのエスカレーター方式の学校だ、つまりそれだけ受験の競争率が高い。一般入試ならば低くても倍率10倍は堅く、二人が受けた推薦入試でも倍率4倍はある超難関校なのだ。そしてその独自の教育システムも神姫が居なければ意味を成さない。神姫が居なくても授業は問題無く受けれるがマスターで無い人間ならば諦めて他の高校を受験するのが普通だ

「どちらかと言うと神姫高校を受けたのは神姫を始める為、更に言えば神妃市に住む為だったんだ」

神姫は確かに日本全国で一大ブームを巻き起こしており、神姫のマスターになる為に日本にやってきたと言う外国人も居る。けれど、拓哉の住んでいた町は例外の一つだった。

「俺の住んでる町ってものすごい田舎町でさ。神姫センターはおろか、協会公認のホビーショップすらないんだ」

神姫と言うのは何処にでも売っている訳では無い。協会直営の才

フィシャルシヨップか、協会の方で神姫を取り扱う事を許可された協会公認のホビーシヨップで見つからない。そして拓哉の住んでいる地域はそれがどちらも無かった。つまり、日本の中で数少ない神姫が盛んでない町、と言うことだった

「でも、俺の親父は役場に勤めているから引越す訳にもいかない。かと言って神姫の事も諦めたくない。だから」

「神姫高校に入学して一人暮らしを、って事か」

顎に手を当てながら拓哉の言葉に続く甚平。確かにその理由なら納得だ

「まあ、最初は親も反対したてたんだ。学費もそうだけど生活費仕送りの関係もあるし」

神姫と言うのはおもちゃと言うよりは既に小人に近い存在だ。とは言え、神姫がおもちゃである事に変わりはない。拓哉の言っている事は「流行のおもちゃで遊びたいから一人暮らしをする」と言っているのと同義。確かに親がそう簡単に許すはずも無い、ましてや神姫高校は大学へのエスカレーター式、子供のあおもちゃの為に7年分の学費と生活費を仕送る。余程、神姫好きな親で無い限りまず認めない

「話し合いの末、父さんは二つの条件を出してきた。一つは神姫高校の推薦入学、しかも第一種奨学金による学費の免除付きで合格する事。二つ目、神姫はあくまで自分の力で手に入れる事、この二つを飲むなら神姫市での一人暮らしを認める、ってね」

「第一種奨学金による学費免除って、全受験者の中で上位5名しか

受けない制度じゃねえか……」

神妃高校、及び神妃学院大学には奨学金制度が設けられており第一種と二種に分かれている。二種が大学卒業後に返済しなければならぬのに対し、第一種は返済不要の奨学金。けれど、これは誰もが受けれる制度ではない。第二種は一般合格者の上位5名と推薦合格者の上位10名が受けられ、その中でも更に推薦合格の上位5名に入った人間が第一種も選ぶ事が出来る

「で、どうだったんだ結果の方は？」

「推薦合格第5位」

「も、ものすごくギリギリですう……」

「全くだ。中学の三年間、この条件の達成に全力を尽くしてきたつてのにそれでもギリギリだったんだ……如何にこの高校が超難関校と呼ばれたか良く判ったよ」

我ながら良くがんばったな、と拓哉は少し遠い目をしていたがふと思い出した様に

「そっぴや、甚平の方こそどうだったんだよ？ 合格者上位十名が載っていた用紙が張り出された後に大騒ぎしてた訳だし」

「俺か？ 俺は確か……」

「ご主人様の番号は一番上に載ってたのです」

「一番上、って事は主席合格かよ……」

まあ、甚平なら納得出来なくも無い。この底抜けに明るい幼馴染、普段の見た目に反し、実は頭を使う事に関しては超が付く天才だ。俺と甚平、そして小早川千歳と言うもう一人の幼馴染の三人でよくテストの見せあつこをしていたが甚平は殆ど満点ばかり取っており、時より1、2問落とすもそれもうっかりミス、ちょいミスと言うレベルだ

「まあ、主席だろうが5位だろうが学費免除には変わらないんだし、よかったじゃねえか。これで親の口をあかしてやれるってもんだろ？」

「ご主人様あゝ、それは違いますう。口を明かすじゃなくて、目を明かすですう」

「おおっと、こりゃ一本取られちまったな。アハハハハ」

「アハハハですう」

「鼻をあかす……な」

ホント、人は見かけによらないものだ

第3話『転機の約束』

「っと、そうだ。すっかり忘れてた」

ポテトを食べていた甚平が突然、テーブルに備え付けられていた小型ディスプレイのスイッチを入れる。そこに映し出されたのは、廃墟。そしてそこでは二体の神姫、セイレーン型のエウクランテがバトルをしていた

「今日はエウクランテクイーン杯をやってるんだ。丁度、決勝戦みたいだな」

二人と一機はそのままディスプレイに釘付けになる。片方がエウクランテ型の標準武装クローのゼピュロスでラッシュをかけているのをもう片方が大剣で防いでいる。やがて、大剣を持った方がバックスステップで距離をとったかと思うとそのままバーニアを使い急上昇。相手の方がクローをデータ化し収納すると今度はビームランチャーボレアスを取り出し撃つも、それも避けられた。やがて、宙に居る方は相手の真上に来ると今度は大剣を振り上げ落下。相手もそれを受けるべく、ダブルナイフのエウロスをクロスさせて受け止めようとする

「……ダメだな」

拓哉がそう呟いた瞬間、落下してきた方が剣を振り下ろし、相手が受け止めるも防いだ方は防御を破られ地面に叩きつけられた。何とか立ち上がろうとするも、やがてそのまま地面に伏し、試合終了のブザーが鳴る

「唯でさえ重い一撃を持った大剣、しかも重力が乗せられた一撃だ。真っ向から防いだのはマスターの判断ミスだ」

「ほ、じゃあ拓哉だったらどうする？」

「そうだな……相手が振り下ろす直前を見極めて抜き胴で一撃当ててから追撃、って所だな」

「いやいや拓哉じゃねえんだから、そんな事は剣道素人じゃできねーっての」

そう、この言葉の通り、拓哉は中学時代剣道部に所属、段級位一級持ちで全国大会で優勝した事もある。特に剣道が好きという訳では無いが通っていた中学が剣道の強豪校で拓哉も部活での内申を稼ぐ為に所属し稽古に明け暮れていた

「それに多少は応用できるかもしれないけど、神姫バトルと剣道は違うからな。そこは覚えておいた方がいいぜ。と、大会も終わった事だし今度はオフィシャルショップにでも行って見るか？俺のねーちゃん、その店長なんだ」

そう言っ、ディスプレイを消すと二人と一機は席を立ち、バーガーショップを後にした

オフィシャルショップ、神姫協会が直営する神姫専門店でありその品揃えもホビーショップよりずっといい。基本は神姫センターなどの神姫の関連施設にしかない店だ。

「姉ちゃん!」

「野乃姉、こんにちわですう」

「あら、甚平、たま子ちゃん、いらっしやい。受験の方はどうだった? って、あら、そちらの子は?」

そこで店員のエプロンをつけ、黒い腰まで伸ばしたロングヘアに優しそうな目に眼鏡を掛けた女性が棚の傍にしゃがみ込み、商品の在庫チェックを行っていたが甚平が声をかけると同時に立ち上がりながらこちらを振り向き、近づいてきた。大木戸野乃香、甚平の姉で拓哉達三人が遊ぶ時の保護者的位置に居た女性である

「受験はバッチリ! それにより」

「お久しぶりです。野乃香さん」

「その声……もしかして拓哉君? 懐かしいわねえ、元気にしてた?」

「ええ、お蔭様で」

「もう、固いわよ拓哉君。昔みたいに野乃姉って呼んでもいいのよ?」

「いや、流石にそれは……」

小学生ならいざ知らず、中学生（しかももうじき高校生）にまでなつてその呼び方は流石に恥ずかしかった

「ふふ、冗談よ。そんな事より拓哉君はどうして此处に？」

「拓哉も神妃校受けてたんだよ。そこで合格発表会場で出くわしたんだ」

「そうだったの、それじゃ拓哉君も神姫をやっている訳ね」

「いえ、実は違つんです」

拓哉が自分の両親との約束の話を終えると野乃香さんは目を伏せたまま考え始め

「しかし、拓哉の両親も厳しいよな。神姫をやりたいなら学費免除で合格しろなんて厳しすぎる」

「きつと……」

そこで野乃香さんはどこか悟つた様な目で二人を見ながら口を開いた

「拓哉君の両親は意地悪でそんな条件を出したんじゃないと思うわ。神姫は確かにおもちゃよ。でも、彼女達にはちゃんと意思や感情がある。つまり神姫のマスターになるって事は動物を飼うのと同義。そこにはマスターとしての責任が生じるわ。拓哉君の神姫への情熱が確たるモノか両親はそれを試す為にそんな条件を出したんじゃないかしら？」

一人暮らしと言うモノがどれだけ大変か、それは大人である親が一番判っていたのだろう。一人暮らしがづらいからと神姫を捨てて親元戻るなんて事は褒められた者ではない。だからこそ、それだけの覚悟があるか試すための条件、そこまで考えてはおらずただ単にお金の都合だとかそんな理由で出したものだと思っていた二人は彼女の言葉に何も言えなくなっていた

「まあ、でも拓哉君はその条件をしつかり果たしたんでしょ？ だったら胸を張ってお父さんとお母さんに報告しなさい。きっと今度は快く認めてくれるはずよ？」

「はい……」

「さてと、となるとこれからは拓哉君もここのお得意様になる訳ね。知り合いよしみでサービスするわよ、気持ちだけ」

「気持ちだけよ!？」

姉の言葉に甚平がツツコミを入れ、場の空気が明るくなった所で店の自動ドアが開き一人の少女が入ってきた。眠たそう、と言うよりは儚げな目つきをし、背中まで伸びだ茶髪をみつ編みにしてそれを肩から背中では無く前の方に下ろしコートに親指だけが分れた手袋、口元を隠すぐらいのモコモコのマフラーを巻いている。

「……こんにちわ」

その少女は店内をきよろきよろ見渡し、こちらの姿を見つけると近づいてきて軽く会釈しながら静かに口を開いた

「遙ちゃん、いらっしやい。今日も神姫を見に来たの?」

顔馴染みなのか、野乃香も親しそうに声をかけると遙とよばれた少女は無言で頷いた。かと、思うと拓哉の姿を見て軽く首を傾げと今度は甚平が

「天音拓哉って言って俺の小学時代の親友だよ。拓哉、こっちは」

「志筑遙、よろしく……」

「あ、うん。よろしく、な」

物静かだが愛想は悪くないらしく、薄く笑みを浮かべながら簡単に自己紹介を済ませると遙はそのまま神姫素体の並ぶ棚に歩いていた

「あの子もこの街の子なんだけど、拓哉君と同じで自分の神姫が居ないの。どうやら家の都合らしくてね。でも、よほど神姫が好きみたいでこうしてよく此処にきては神姫を眺めているのよ」

「そうなんですか」

「と、そうだね。甚平、せっかく来たんだしたま子の定期チェックしていく?」

「そうだな、そんじゃお願いするわ」

「お願いするわ、ですう」

甚平からたま子を預かると野乃香は店の奥の方に引っ込んだ

「たま子、どこが悪いのか？」

「そんな訳じゃないさ。自分の大事な相棒なんだ、体調に気を使うのもマスターの勤めつてもんだろ？ 人間で言う、健康診断みたいなもんさ。さて、俺はちよつと武装の方を覗いてくるから拓哉も好きに見て回ってくれ」

そういい残し、甚平もその場を離れていった。拓哉は手持ち無沙汰にしていたが、やがて遥の隣に立つと

「毎日、此処に来ているんだって？」

「うん……」

「そっか……俺は此処に来るの、ってか神姫を生で見る事自体、初めてなんだ」

「……そうなの？」

「ああ、俺の住んでるとこ、神姫が全然盛んじゃなくなてな。俺もまだ持ってないんだ、自分の神姫」

すると、遥は少し表情を陰しくすると

「神姫はモノじゃない……だから、持っていないなんていい方は、違う……」

「そうだったな。ゴメン……」

「……うん」

拓哉の謝罪に満足げに頷くと遙は、再び神姫に目を戻し、拓哉も同じ様に神姫を見つめる。箱の透明のビニールの部分から姿を覗かせる神姫はこれだけを見ればただの人形にしか見えないが、バトルや様々な所で笑ったり、怒ったり人と同じ様に動いている姿を見た二人には、目の前の神姫達はまるで眠っている様に見えた。まだ見ぬ自分のマスターとの出会いを心待ちにしながら

「それじゃ、俺は帰るよ。帰って必要書類も書かないといけないし」

「……それじゃ」

「おう、そんじゃまたな。っと、その前に拓哉、携帯もってるか？
せっかくだし番号とアドレス交換しとこうぜ」

「あ……わたしも、いい？」

「当然！」

あれから、三人は夕方までオフィシャルショップで神姫を見たり野乃香さんとお話をしたりしても既に夕方になっていた。拓哉はそろそろ帰宅するべく、駅に向かい甚平と遙の二人はそれのお見送りにきていた。そんな時、陣平がそんな提案をしたので三人はそれぞれ携帯を取り出すが

「甚平、お前の携帯って少し変わった形だな。どこのメーカーだそれ？」

二人が普通の携帯なのに対し、陣平の携帯は横の二つの辺の長さが同じでない縦に引き伸ばした六角形のような形をしており、ボタンの付いている方が白く、ディスプレイの方は緑色をしている。拓哉が尋ねると甚平は待っていましたとばかりに

「ふっふっふ。良くぞ聞いてくれた！ 何を隠そう、これはなんと

」

「バトルフォン、神姫マスターが持つ携帯で、神姫マスターの証：

……」

「は、遥ちゃん、俺の台詞取らないでくれる……」

まるで水戸黄門の印籠の様に携帯バトルフォンを拓哉の前に突き出しながら甚平の言葉を遮り、遥が手短に説明すると甚平はそのポーズのまま、目を遥の方に向けるも遥はその視線を無視して拓哉と番号を交換する

「……甚平も」

「お、おう……」

「神姫のマスターはみんなこれを持っているのか？」

「うー、たぶん全員って訳じゃないと思うぜ。機種変メンドイとって理由で従来のICチップカードのままの奴もいるし。ただ、

バトルフォンには神姫マスターにとって便利なアプリが勢ぞろいだし、これから神姫を始めるなら断然こっちにした方がいいと思うぜ」

「なるほど、覚えとくよ。さて……そんなじゃ改めて、またな二人とも」

「おう！」

「……また」

拓哉が軽く手を挙げて言つと、甚平は大きく、遥は小さく手を振つて応え、拓哉は駅の中に戻っていった

「ふう……」

そしてその日の晩、拓哉は必要な書類の準備を終えてベッドの上に倒れこんだ。あの後、親に事の次第を告げると、最初は驚いていたが野乃香の言うとおり今までの事がウソの様に両親は自分の一人暮らしを認め、明日からは家事や料理の特訓を始めるそうだ。後は明日書類を投函すれば全て完了だ。とは言え、今の時期はまだまだ受験シーズン真っ盛り。それから一足先に解放された拓哉は残りの中学生生活何して過ごすか考えていると突然、携帯に着信が入った。

差出人は甚平からだ、内容

『よう！ 新年の予定ってもう決まってるか？ 決まってるねえなら3日に神姫タワーで新春神姫祭りがあるんだけど遙ちゃんも誘って一緒にいかなえか？』

と言う内容だった

「3日、か……」

拓哉はカレンダーに目を向ける。3日なら祖父母とかの知り合いの家めぐりも終わってるし大丈夫そうだと判断すると、拓哉は了承の返事を返し、携帯を置いた。このなんて事無い約束が拓哉にとって大きな出来事になるとは、まだ知らずに

第3話『最高のお年玉』（前書き）

神姫の発売順や、原作キャラのパートナー神姫は物語の都合上変更する事がありますがご了承ください。また、神姫の武装に関してはそのぞれの神姫の専用武装は名前で、汎用武装は武器の種類で記述します

第3話『最高のお年玉』

神姫タワー、大規模な神姫関係のイベントや大会の会場となる施設で、巨大な高層ビルとその近くに小さいながらもドームが建てられ、更には遠くからやってきた出場マスタ―の為の宿泊施設も完備、敷地内の広場は大きな公園となっており、人々の憩いの場とされている神姫センター以上に大きな施設である。当然、今回の新春神姫祭りもここで開催される。何時もは穏やかな雰囲気にも包まれた公園も今は沢山の出店が立ち並び、別のスペースではコンサート等のイベントが行なわれている

「すっげー……」

「わぁ……」

そんな活気溢れた様子を目の当りにし感嘆の声を上げる拓哉と遥。なんで会場に入らないのかと言うとまだ甚平が来ていないから、本人の名誉の為に言えば決して甚平が遅刻している訳では無く、ただ単に今日の事が楽しみで二人とも早く着いてしまっただけだ

「ここじゃ毎年こんなお祭りが行われているのか」

「他にも夏や秋にも同じ様にお祭りをやっているの……。でも、実際に来たのは今日が始めて」

「そうなのか？」

「家の都合で……」

「おっと……」

「……」

拓哉の言葉に遥は無言に頷いた後に答えると時計に目をやる、待ち合わせの時間まで後10分チヨイだ

。そして時計から目を離れた時、後ろから近づいてきた男性が遥にぶつかった。手には大小のダンボールが積まれ、その所為で遥に気づかなかったのだらう。ぶつかった拍子に一番上に積まれた小さな箱が二つ零れ落ちたが、地面に落ちる前に拓哉と遥がそれをキャッチした

「済まない。荷物が多くて前が良く見えなかったもんだからね」

「……大丈夫です」

「どうぞ、落ちそうになりましたよ」

男性の謝罪に二人が大丈夫だと答え、それぞれがキャッチした箱を男性に返す。男性の姿は白の作業服に身を包み、服と同じ色の帽子を深く被っている。

「ありがとう。ところで君達は会場に入らないのかな？」

「はい、友達と待ち合わせしているんで」

「なるほど」

男性は荷物を一度下に置くと二人の顔を見渡し、やがてポケットから二枚の細長い紙切れを取り出し二人に差し出した

「貰ったものなのだが私には必要ないからね。君達にプレゼントしよう」

その紙切れには『開運神姫くじ抽選券控え』とかかれ、4桁の番号が書かれている。よく見ると端っこの方は切れ目にそって切れた跡があるが、恐らく抽選に使う半券部分が付いていたのだろう

「……いいんですか？」

「なに、さっきぶつかってしまったお詫びと大事な荷物を守ってくれた御礼だ。遠慮なく受け取ってくれたまえ」

二人はお互いに顔を見合わせた後に男性に頭を下げ、彼も満足げに頷くと「では、仕事があるので失礼するよ」と言い残し、再びダンボールを持って会場に入っていた

「今の人、FR社の人か？」
フロントライン

「たぶんそう……服の背にロゴマークが入ってる」

「よっ、二人ともあけおめ」

「ことよろですう」

その入れ違いに甚平とたま子が姿を現した。

「……おめでと」

「ああ、おめでと」

「しっかし二人とも早いな、まさかとは思っけど俺が遅刻したってオチは無いよな……？」

二人が余りに早く来ていたもんだからもしや自分が時間を間違っただんじやと思いつきに目をやりながら訊ねると

「……正解」

「マジっ!？」

「……ウソ、冗談」

「な、なんだ冗談か……」

一瞬体を強張らせるも後の遥の言葉を聞き、一気に脱力した

「あははは、さて、全員揃った事だしそろそろ俺達も行くか」

「うん……」

「だな、ところで二人の持ってるそれってもしかして神姫くじの抽選券？」

「さっきF R社の従業員とぶつかってな、そのお詫びだそうだ」

「マジかよ、うわゝ失敗した。俺も早く来てりや良かったぜ」

そこでようやく二人の持ってる抽選券に気づき、二人はそれぞれバックと財布の中に券を仕舞いながら拓哉が説明すると甚平がつく

りとうな垂れる。が、すぐに元に戻り

「まあ、後で神姫ポイントで買えば良いだけか」

神姫ポインは神姫関係の買い物に使う事の出来るポイントの事だ。武装や神姫の素体は現金で買うとしたらかなりの値が張る。特に素体に至っては最新型のPCに迫る値段をしている。そして神姫ポイントとは普通の神姫バトルのファイトマネー、今回の神姫くじの様な神姫関係のイベントの賞品、公式バトルを始めとした各種大会で好成績を残す事で溜まっていく。裏を返せばこの神姫ポイントはマスターにならなければ殆ど溜める事が出来ない為、一体目の神姫はみんな大体は現金で買い、以後は神姫ポイントで購入するのが普通だ

「抽選会は……午後から見たいだな。午前は新春バトル大会アマチュアの部があつて、プロの部は明日か」

「……アマチュア？」

「プロとかつて、何の事だ？」

三人が受付の人から貰ったパンフレットを確認している中、遥が甚平の言ったアマチュアという言葉について訊ね、拓哉も気になったらしく同じ様に甚平に目を向ける

「ああ、そっいや二人は知らないんだよな？ 神姫のマスターは大きく分けてアマチュアマスターとプロマスターに区別されるんだ。神姫協会の認定試験を受けて合格した人がプロマスターになれてFバトルとか言った全国規模の大会に参加出来るって仕組みさ。プロマスターの大会ともなるとポイントだけでなくホントの賞金も出るから、プロマスターになってそれで食ってる奴もいるんだぜ」

「最早、ただの遊びの域を超えてるな……」

「その通り、神姫バトルは既に遊びじゃなくて一種のスポーツと呼んでも可笑しくないんだ。まあ、長い説明はこのくらいにして折角だし俺もこの大会に出てみるか。丁度、この間新しい武装を買った所だしな」

「へえ、なにを買ったんだ？」

「新しいアックスですう。これで相手を大・粉・砕、です」

それから、大会の受付が始まるまで三人は出店を見て回っていた。普通のお祭りと違うのは神姫のお祭りだけあって、食べ物だけでなく正月限定の武装を売ってる出店もあり、くじや射的の賞品も殆どが神姫グッズや武装関係となっている。その内大会の時間となり三人は神姫タワーのドームに入り、甚平は参加申し込み、二人は観客席に移動している。大会はまずAからFまでの幾つかのブロックに別れ予選トーナメントが行なわれ、各ブロックの優勝者6人が総当り戦で総合優勝を決める、と言うルールの様だ

『いまだたま子！ 一気に突っ込むぞ！』

「にゃ〜〜！」

そして、総当り戦。甚平は4勝1敗で最後の戦いを迎えている。相手は姉妹機として存在している戦乙女型神姫の妹機アルトアイネスだ。マスターはプラチナブロードのロングヘアーをした少女。他の人と違い、高級そうな衣服に身を包んでいる事から何処かのお嬢様を思わせる。そして相手の戦績も4勝1敗で事実上、これで優勝が決まる。相手の多弾頭ミサイルと機関銃の銃撃を掻い潜り、腕の装甲と一体化した裂拳甲で殴りかかる。相手の方も大慌てで赤い大剣ジークムントを取り出し迎撃に入るも、大振りの大剣では間に合わず、たま子のパンチをモロに受ける

「にやつ、にやつ、にやつつ！」

その後もジャブやストレートと言ったラッシュが入り、最後に上段の後ろ回し蹴りが入る。たま子の戦闘スタイルは完全近接高機動戦闘だ。武器は小ぶりで大振の武器が一つずつだけの軽量装備で相手の攻撃を掻い潜り接近戦で一気に決めると言うものだ。バーチャルバトルなのに武装の重さなんて関係あるのかと思うかもしれないがそれはまた後程。とにかく甚平とたま子はそのみを徹底的に磨き上げてる為、射撃戦闘や間合いを取られた場合はダメダメだが、一度相手の懐に潜り込めば無類の強さを発揮する。そして

「『これで、フィニッシュっ！（ですうっ！）』」

「うわあっ！」「きゃあ！」

こぶしで相手がひるんだ所を新しく買ったと言っていた斧をフルスイング。アイネスは大きく吹っ飛ばされ、アイネスとそのマスターの少女が悲鳴を上げ、地面に落ち動かなくなり試合終了のブザーが響く

「うつしやあつ！ やったぜたま子！」

「やったのですう！」

ライドオンシステムの際に使うバイザーを取り外し、バトルに使う筐体から出てきたたま子を自分の手の上に乗せてハイタッチをする。やがて反対側に居た少女もバイザーを外しふう、と息を吐くと同時にアイネスも筐体から出てきてマスターの手の上に乗る。

「くやしーっ！ あんな奴、僕の普段の装備を使つてたら楽勝だったのに〜！」

「あらあら、そんな事を言つてはいけませんよ。それに、接近戦でしたら普段のルナリエちゃんでも勝負は判りませんでしたわ」

自分の手の上で地団駄を踏んでいるアイネスことルナリエをおつとりとした口調で慰めている。やがて甚平の方に近づいてくると

「まいりましたわ。とてもお強いんですね」

「へへっ、まあ接近戦ならそう簡単には負けない自信があるんですよ」

「ふふっ、ところで見た感じ中3の方みたいですけど高校はどちらに？」

「えっ？ えっと、神妃校に通う事になってますが」

「そうなんですかあ。でしたら、またお会いする事になるかもしれませんわね。兎に角、優勝おめでとうございます。ではこの辺で、

失礼しますね」

と、そう言い残してステージから降りていく少女。それと入れ違いに司会進行の人が近づいてきて

「優勝おめでとうございます！ さて、今年の神姫祭りはF R社が中心となって開催されている為、今回の優勝賞品もF R社からの贈呈となりますが準備の方がまだ出来ていないらしいので準備が出来るまでしばらくお待ちください。丁度、神姫くじが終わる頃に贈呈できるとの事ですので。では、今回優勝した、大木戸甚平君とたま子にもう一度盛大な拍手をー！」

観客席から湧き上がる拍手の雨に甚平とたま子は大きく手を振り応え、大会は幕を閉じた

「お疲れ、優勝するなんてすごいじゃないか」

「……おめでとう」

午後の神姫くじの準備の為、来客者はドームから一旦出る事になり、拓哉達と合流した甚平は二人から労いの言葉を受けていた

「サンキュー。ただ……」

「ただ？」

「最後の対戦相手、なんて言うかまるで今回は手加減して戦っているかの様な言い方だったんだよな」

最後のバトルの後、ルナリエの言っていた言葉。それがホントならば今回の戦いでは彼女達は本来の武装、つまり本気で戦ってはいなかった事を意味する

「そこが、どうも引つかかるんだよな。それに、神妃校ならまた会う事になるかもと言ってたし」

甚平の疑問に拓哉も腕を組んで考え込むが答えは見えない。やがて

「また、会えた時に……訊いたらいいと思う」

頭を悩ましている二人に対し、遙がそう答えると確かにそうだと二人も考えるのをやめて

「それもそっか……うっし！ 悩むのは此処までにしてまた祭りめぐりでもするか！」

甚平の言葉に二人も頷くと三人は再び人ごみの中に混じっていったのだった

それから、小さな神姫のコスプレをした女性達のコンサートが公園内の特設ステージで行われているのを昼食を食べながら観賞したり、途中、武装ではなく神姫サイズの着物を取り扱っている出店でたま子に着物を購入し着せたりとお祭りを満喫した三人。昼を過ぎ夕方
に近づき始めても祭りの盛り上がりは弱まらず、むしろ仕事を終えてからやってきた人々で更なる賑わいを見せている。そんな中

「さあ！ 来客の皆さんお待ちかね。午後の部の目玉イベント、開運神姫くじの抽選会を始めたいと思いますーす！」

ドーム内にあった筐体は全て片付けられ、代わりに白いクロスが敷かれた。二段になっている横長のテーブルの上に色々な景品が置かれ、その前には円柱状の機械。透明なプラスチックの中には機械によって風が吹いているのか。抽選に使われる半券が不規則に舞っていた

「今回、抽選券を引いてもらうのはFR社の社長。西園寺信英さんさいおんじのぶひでにお願いしてもらいます！」

司会がそう言ってステージ脇に手向けるとそこからスーツに身を包んだ男性が姿を現した

「あの人！」

「会場でぶつかった……」

あの時は帽子被っていた為、表情までは判らなかったが紛れもなく二人があの時ぶつかった男性だった

「皆さん、こんにちは。ただ今紹介に預かったF R社西園寺信英です。今回は僭越ながら神姫くじの抽選を行う事になりました。加えて、抽選の後には我が社から重大な発表もあり、この場を借りてそれを行わせてもらおうと思います。では、この新年を祝うめでたい良き日、皆さんに幸運の天使が微笑む事の祈っていますよ」

「幸運の女神じゃなくて天使、か。流石フロントライン社の社長って所か」

「ん？ F R社である事と何が関係あるんだそれ？」

「F R社は……天使型神姫、アーンヴァルを開発した会社」

「なるほど、それで天使な訳か」

と、拓哉が納得した所で、信英が抽選機のゴム状になっている所に手を入れ、ランダムに半券を掴んでは係りの人に渡していく。やがて一等から五等まで全部出揃い、抽選結果が五等賞から告げられていく。神姫の形をしたストラップや大量の神姫ポイント、リペイントと呼ばれる色違いの武装等様々な商品が当選者に手渡されていき、残りは一等賞の発表のみとなったがその段階でステージ上にあった景品は全て無くなっている

「さて、残るは一等賞のみとなりましたがこちらの賞品も只今準備を進めており、もうすぐ整うと思いますので先に番号の発表をさせてもらいます。では」

信英は言葉を切り、咳払いをした後にその言葉を告げる

「神姫くじ一等当選番号、2257番！」

信英がその言葉を告げた瞬間、遙は目を見開き突然その場に立ち上がった

「遙？」

「おいっ、まさか！？」

遙が言葉が無いのか無言のまま二人に券を見せる。間違いなく一等の当選番号だ

「おまつ！ わざわざ見せんでいいから早く行けっ。待たせすぎると無効になっちまう！」

「落ちて甚平！ そんなあせらんでも大丈夫だって。遙もとりあえずステージに行ってくれ」

「ま、マスター！ 落ち着くですう！」

甚平が若干取り乱したのを拓哉とたま子がなだめ、遙は小走りで観客席から駆け下りステージに向かい、ステージに上がる頃には少し息切れをしていた

「おや？ 君はあの時の少女だね。そうか、私のあげた券が一等賞だったという事か」

信英の言葉に無言で頷く遙。そんな彼女の様子を優しい目で見ていた信英だったが一度目を伏せ、改めて観客席に目を向けると

「さて、一等の当選者が決まった所でもう一人。午前の部の新春神

姫バトル大会アマチュアの部優勝者、大木戸甚平君！　もし、居るのなら君もステージへ」

「へっ？　お、俺！？」

何が何だか分からないと言った状態だが、甚平もとりあえずステージの方へ上がると、同時にステージの後ろの垂れ幕にスクリーンが映し出される。そこには二体の神姫がフル装備でポーズを取っている画面が映っていた

「さて、こちらは我が社を代表する二大神姫、アーンヴァルとストライフの後継機、アーンヴァルMk2とストライフMk2です。初期の二体が他社が次々に生み出している最新鋭の神姫達に対抗するのには限界がありました。故に今回、この二機の後継機の開発に着手、つい先日プロトタイプの完成に至りました。無論、神姫の強さは神姫の新旧が全てではありません。現F1クラスのチャンピオン、竹姫葉月さんも初期のアーンヴァル型で並み居る強豪達をなぎ払いチャンプの座を不動のモノとしているのですから」

すると今度はステージ脇から係員に運ばれてクリアケースに入れられた二体の神姫が姿を現したケース内の突起や段差に支えられる形で立っているがまだ起動はしておらずその目は閉じられている。装甲は専用武装のフルアームズで、手にはそれぞれアーンヴァルは大剣をストライフはハンドガンを持っている。しかし

「そしてこちらが今回開発された神姫のプロトタイプ。標準のカラーリングでも良かったのですが、この新年の祝う日にただそれだけではあまりに芸が無い。故に今回この二機はプロトタイプでありながら同時にリペイントタイプとして開発しました。正式名称はアーンヴァルMk2・テンペスタとストライフMk2ラヴィーナ」

今までのアーンヴァルが薄い金髪で白が基調だったのに対し、テンペスタは薄い紫に黒を基調としており、それとは逆に水色の髪に黒がメインだったストラーフは完全な黒髪に白を基調とした色合いをしている。

「さて、今回ステージに上がってきてもらった大木戸甚平君と……」

「……志筑、遥です」

信英は遥の名前をまだ聞いていなかった事を思い出し、彼女に目を向けると遥も察したらしく自己紹介をすると

「志筑遥君だね。では二人にはこの神姫のテスター、即ちマスターになってもらいたい」

「ええっ!？」

「この子達の……マスターに？」

突然の申し出に甚平は仰天、遥もポカンとした表情で二体の神姫を見つめている

「無論、強制と言うわけでは無い。最終的な意思決定は「……やります」遥君？」

「この子達のマスター……やらせて下さい」

最初はポカンとしていたがやがて遥はその目に強い意志を宿して静かながらにハッキリと告げた。それもそうだ、遥は家の都合で神

姫を迎えられずに居た。そんな時に巡って来たこの機会、断るなんて選択は彼女には無かった

「中々決断力のある子だね。判った、なら君にはラヴィーナのマスターをお願いしよう。さて、後は甚平君だが君はどうするかな？ 遥君がラヴィーナのマスターになる以上、君はテンペスタのマスターになってもらいたい訳だが」

遥の決断に満足そうに頷くと今度は甚平に声をかける。が、甚平は神姫をジツとみつめたまま黙っている。普段なら「マジっ！？」やります！ 是非やらせてください！」と大はしゃぎしそうな彼が無言のままに居る事に遥が首を傾げると

「一つ聞きたいんですけど、この二機のテスターって、腕のいいマスターじゃなきゃいけないって事はないんですよね？ でなきゃ、マスターで無い奴が当選しても可笑しくない、ってか現に当選したこの神姫くじの景品にする筈ないですし」

「ん？ まあ、そうだね。テスターなのだからデータ収集の他に神姫の能力上の欠点とかを探す目的もあるしね。勿論テストが終わった後もマスターは続けてもらうつもりだからこの子達を大事にしてくれるマスターなら誰でも問題は無いが」

下手に凄腕のマスターにテスターを頼んだらその手腕で欠点を補ってしまう可能性がある。そういう意味ではテスターには初心者かそこそこの腕のマスターと言うのは間違いではない。やがて、甚平は決意した様に頷くと

「ちょっと待って下さい」

そう言って観客席に戻ると

「おい、拓哉。ちょっと来い！」

「ちよっ、いきなりどうしたんだ？」

「いいから来い！」

観客席でポップコーンを食べていた拓哉の手を引き、ステージに戻ってきた

「君は、遥君と一緒に居た少年だね」

「俺の親友で天音拓哉って言うんです。信英さん、テンペスタのマスターなんですけど俺じゃなくてこいつに任せてもらえませんか？」

「甚平！？」

「ほう？」

「遥ちゃんもですけど、この二人は神姫が好きだって気持ちはずごく強いんです」

遥は家の都合で神姫のマスターになれずとも毎日の様にオフィシャルショップを訪れては神姫達を眺めていたし、自分と会った時はたま子と本当に楽しそうに話していた。拓哉に至っては言わずとも神姫のマスターになりたい、その一心で超難関校の神妃校を推薦上位で合格してみせた。二人の神姫への想い、それがどれだけのものが甚平は痛いほどに判っていた

「きつとこいつならすごい良いマスターになってくれると思うんで
お願いします!」

「ふむ……」

しばらく信英は拓哉の事をジッと見つめ、やがて

「天音拓哉君、だったかな?」

「は、はい」

「神姫は好きかね」

「……はい!」

拓哉が遥と同じ様にハッキリと頷くと、信英は口元に笑みを浮か
べたまま目を伏せ

「良い返事だ……よし判った! 甚平君の頼み通り、拓哉君さえよ
ければテンペスタは君に任せよう。どうする?」

拓哉はクリアケースの中で目を閉じているテンペスタに目を向け
た。天使と言うよりは堕天使と呼んだ方がしっくりくる黒い神姫。
やがて、信英の方に目を向ける頃には彼の返事は決まっていた

第4話『ようこそ、武装神姫の世界へ』

思いもよらぬ所から神姫のマスターとなる事になった拓哉と遥の二人。二人は今、甚平を連れて神姫センターのスタッフルームの一室に居る。ここでテンペスタとラヴィーナの起動及び、マスター登録を済ませる事になっている。

「ところで甚平」

「ん、どうかしたか？」

二体の神姫の到着を待っている三人。そんな時、拓哉が不意に甚平に声をかけた

「その……ホントに良かったのか？ 折角の機会なのに俺に譲った
りして」

拓哉の言う折角の機会と言うのは新たな神姫のマスターになれる、と言う意味だけではない。神姫のマスターならば全員とは言わずともその多くが憧れを抱く事がある。それは“この世に二つと無い自分だけの神姫”だ。けれど、そうした神姫のマスターになれるチャンスはあってもそれを掴み取れる事はそうそう無い。こうしたイベントでの抽選や大きな大会での景品であるリペイントタイプの神姫を、と言うのがごく一般的だが抽選は何百何千の分の1と当選の可能性は非常に低いし、大きな大会ならば優勝するだけの実力がある。だからこそマスター達は神姫の性格などの心の有り様を決めるCSSCの組み合わせを変えたり、独自の武装のアセンブルを考え、少しでも他の同型神姫との差異をつけようとする

「特に今回の神姫はリペイントである以上にプロトタイプでもある。それが何を意味するかは甚平も判ってるだろ？」

更に言えば今回の場合はリペイントだけでなくプロトタイプと言うのも関係している。プロトタイプと言う事は起動テストを経て、製品化に向けてのプログラムの改善や調整が行われる。つまり今回の2機は悪い意味も含むが外見も中身も違う、ホントの意味でのこの世で一機しか存在しないの神姫となる。

「まあ、ぶっちゃけ言わせて貰えば、ものすごく惜しくは有るけどよ。俺にはもうたま子が居るし、それに同じ様なチャンスはまた来るだろうしな」

そう言つて大会で疲れたのかパワーセーブモード、即ちお昼ね状態のたま子に目をやる。掴み取れる可能性は少なくともチャンスそのものが少ない訳では無い。神姫が盛んである限り、FR社を始めとした各企業は新型の開発に力を入れていくだろう。そもそも新型のテストをイベントの賞品にと言うケースは過去にも良くある事だった

「これで親友が晴れて神姫マスターの仲間入りする事が出来るなら今回は潔く譲る事にするよ。あつ、でもお礼はしっかりしてもらつて、そこは譲れねえかな？ とりあえずは神姫祭りの最中は全部拓哉の奢りって事で！」

「判ったよ。全く……そう言う所はホント抜かり無いな、お前つて」

途中まではすごく友達思いの良い事を言っていたが最後の最後でちゃっかりしている。人差し指と親指で輪を作りながらギブアンドテイクを持ち出す甚平に拓哉も苦笑を浮かべながら言葉を返すと「

ヤリイツ！」と甚平は指を鳴らす。ちなみに遙はを言つと楽しみで仕方ないのか、さつきから片時もドアから目を離さず自分のパートナーの到着を心待ちにしている

「済まない、待たせたかな？」

その時、ドアが開き、スタッフの人と信英が入ってきた。その手には二人にとって見覚えのある箱を持っている。そう、ぶつかつた時に地面に落としそうになり二人がキャッチした箱だつた

「もしかしてその中身があの一機だつた？」

「その通り、そういう意味ではこの二機のマスターに君達が選ばれるのはどこか運命じみたモノを感じずにはいられないな」

神姫の入つた箱を二人の前に置かれ二人が蓋を開けるとそこにはさつきと違い、武装と素体が別々にしまわれている神姫とクレイドル、武装に関する説明書。そしてCSCが入っている

「それと私個人の方から、二人には新たなマスターの誕生を祝つてこちらを送らせてもらつよ」

「……バトルフォン」

そう言つて信英が差し出したものは二つのバトルフォン。ヘッド部分のカバーカラーはそれぞれ黒と薄い紫色、どうやら二機の神姫のヘアカラーを参考にしているらしい。お礼を言いながらがそれを受け取る

二人

「とは言え、機種変更はまだだからそっちの方は後で専門店で各自済ませておいてくれ」

そして、いよいよ二人は神姫の起動準備に取り掛かる、普通はCSCの組み合わせを考える事から始めるのだが今回はテストと言う事で基本性格設定で起動する事になった。CSCをセットし終え、神姫をパソコンとつなげたクレイドルにセットする。クレイドルと言うのはパソコンを通じ神姫の充電を行う装置の事だが、形状が背もたれが少し鈍角に傾いた手すり付きの長椅子の形をしている為、充電器と言うよりはベットに近い印象を受ける。後はパソコンの方で起動プログラムを立ち上げ、初期充電の完了を待つだけだ

「さてと！ それじゃあ待つてる間に俺の方からバトルフォンの機能についてレクチャーすつか」

「……よろしくお願いします」

「うむ。それじゃ、二人の奴は機種変手続きをしないと使えないから俺のを使つて説明するぞ」

そう言つて甚平は自分のバトルフォンを取り出して開く

「改めて、これがバトルフォン。自分がマスターを勤める神姫、所持している神姫ポイントと登録した所持武装やアセンブルのエディット。プロマスターになればFバトルにおけるランクと順位と言つた、マスターに関する基本情報情報は全てこれに記録されているんだ」

「……エディット？」

「自分の神姫やポイントとはかく所持武装の一覧、ましてや武装の組み合わせまで記録しているのか？」

「ああ、リアルファイトならあまり関係ないけど、ライドオンバトルやバーチャルバトルをする時にはこれが重要になってくる。まあ、それは実際にバトルをする時に説明するとして話を続けるぜ。他にも神姫ポイントで支払いを行う際はこれが財布代わりになる、ってのは二人ももう判ってるよな？」

甚平は神姫ポイントで買い物をする際にはバトルフォンをお財布携帯の様に使っていた事からそれは予想できた為、普通に頷いた

「と、まあここまでは従来のカード型と同じで、バトルフォンのすごさは此処からだ」

そう言っ、甚平は更にバトルフォンを弄るとディスプレイにはまるでレーダーの様な画面が表示され、その真ん中近くに緑色の点が点滅している

「バトルフォンにはGPSを利用して登録した神姫の位置を示すレーダー機能や、離れた場所での神姫との通信機能が搭載されているんだ。特に通信機能に関してはマスターの基本情報とは別の通信用の登録を行えば他のマスターの神姫とも通信が出来る。これで万一、神姫とはぐれても通信やレーダー機能がすぐに位置を把握しやすくなるって訳だな。バトルフォン発売前に生産された神姫はバトルフォン未対応で、その場合は専門の業者に持っていてバトルフォンに対応出来る様にカスタムしてもらう必要があるけど……まあ二人の場合は関係ないな。新型なら当然バトルフォン対応だろうし」

と、そこでパソコンの方から音が聞こえた。どうやら、起動準備

が完了したらしい

「おっ、丁度準備の方が整ったみたいだな。そんじゃまお待ちかねの神姫の起動とマスター登録と行きますか！」

待ちに待った瞬間。まずは遙が左手を軽く握り、それを胸に当てた状態でゆっくりとパソコンのエンターキーを押した

「初期起動モードに移行、マスターの登録及び神姫の名称設定を行って下さい」

「神姫は最初に起動した時は初期起動モードになっているんだ。神姫の視界に自分の顔が映る様にしてから何かを話す事でマスターが登録される仕組みさ。名称の方はPCの方に入力画面が出るからそこに入力すればいい」

「えっと、それじゃ……よろしく、ね」

遙がラヴィーナと目を合わせておずおずと声を出すと

「容姿登録、声紋認証確認、マスター登録を完了。次に神姫の名称設定に移行します」

「名前……」

遙はしばらく考えていたがやがて頷くと

「決めた……あなたの名前は」

遙はパソコンに名前を打ち込み、再びラヴィーナと目を合わせ

「……レイナ」

そう告げてエンターキーを押した

「名称『レイナ』、登録完了。初期起動モード全プロセス完了を確認。通常起動へ移行します」

そう言つて、ラヴィーナことレイナは再び目を閉じ、また開けた。さっきと違うのはその目に光が宿っており、レイナは体を起こし立ち上がると、遥の方に目を向けて

「はじめまして。突然で申し訳ないが、私はマスターの事はどう呼べばいい？」

「遥でいい……よろしくね、レイナ」

「遥、か。判った、よろしく頼む」

遥は無言で頷く。その表情は喜びで僅かに赤みを帯びている

「レイナの方は無事に起動したな。それじゃ次はテンペスタの方だ」

「はい」

拓哉は返事をする。とテンペスタの方に向き直り、深呼吸をしてからエンターを押す。やがて、レイナ同様、テンペスタも初期起動モードに入り、さっきの遥と同じ様にマスター登録を済ませ、名称設定に入る。拓哉は顎に手をあてて彼女の名前を考え始めるやがて

「セフィ……今日からお前の名はセフィだ」

「名称『セフィ』、登録完了。初期起動モード全プロセス完了を確認。通常起動に移行します」

そしてテンペスタ改め、セフィも一度目を伏せてこちらはゆっくりと目を開け、ゆっくりと立ち上がる

「初めましてマスター！ マスター事はどという風に呼べばいいですか？」

「それじゃ、今のままマスターで良いかな」

「判りました。それじゃあマスター、改めてこれからよろしく願いますね！」

セフィは明るい笑顔で言う。拓哉も同じ様に笑みを浮かべる

「ああ、こちらこそよろしくな。セフィ」

「はいっ！」

二体の起動を見届けると信英は拓哉と遥の肩に手を置いて、2人と2機は信英の顔を見上げた

「どうやら、二体とも無事に起動できたようだな。これでレイナとセフィは二人の神姫となった。君達にとって初めての神姫だ。だからと言う訳ではないが末永く大切にしてくれ。そして」

信英はそこで言葉を一旦、切り

「ようこそ、武装神姫の世界へ」

新たに誕生した二体の神姫と二人のマスターに歓迎の言葉を告げたのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1195z/>

武装神姫《BATTLECHRONICLE》

2011年12月20日22時54分発行